

2月25日 ヨハネによる福音書9章35～41節

説教題：「愛がなければ見えない」

普段私たちはあまり意識しませんが、私たちの身の周りには目に見えないものがたくさん存在します。例えば川や池で引きずり込まれるように水に落ちた人を見た時には、「河童がいるのかもしれない」と思ってしまうように、確からしい根拠があることによって、私たちは目に見えないものの存在を認識することが出来るのです。同様に目に見えない愛を誰かに示すためには、その根拠として自分が愛されていることを知る必要があります。愛を受けて愛に満たされることによって、愛する方法を知ることが出来るのです。

今日の個所では、生まれながらの盲人がイエス様の力によって癒されたその後の出来事が記されています。ユダヤ人たちに尋問され追い出されたこの人のもとにイエス様は訪れます。イエス様に奇跡の業を施され、メシアが確かにいるという確信があったこの人は、目の前のイエス様がメシアだということを理解し、「ようやく会えた」と感動します。38節の「主よ、信じます」という短い言葉には、言葉にできない大きな感情が含まれていました。

一方で、イエス様のことを見ており、その奇跡のことも知っていながらイエス様の奇跡を「見なかった」ことにしたユダヤ人たちは、本当は存在しない罪を「ある」と言って探しながらイエス様のことを信じる事ができませんでした。彼らはそこにメシアがいることに気がつかないまま、イエス様を十字架へと追いやることになります。

私たちは普段、このような箇所を読む時に盲人に対して感情移入することが多いと思いますが、時に私たちは「盲目のユダヤ人たち」になってしまっていることがあるのです。実際の所私たちも、自分が普段の生活をしている範囲以外には、人がいないのと同然の生活を送っていることがほとんどだと思います。それだけ私たちが、目に見えないもの、目に見えない範囲の人々を、関心をもって認識し続けることは難しいことなのです。その当たり前の状態を打ち破ることを、イエス様は求めています。私たちが関心をもって、愛をもって、この町の外にいる一人一人を、この国の外にいる一人一人を、隣人として愛することが求められているのです。

その為の業を、私たちは行ってきました。ウクライナへの献金によって、秋田県豪雨水害への献金によって、そして今は能登半島を震源とした地震への献金を行いながら、今私たちの隣にはいない人々、見えない人々でありながら、共に生きる隣人として認識して、彼らに対する愛の業を行ってきているのです。献金だけではない、様々な業によって、私たちは誰かを見ることが、愛することが出来るようになるのです。

私たちには愛が注がれて、私たちもまた誰かを愛する力が与えられています。だからこそ顔を挙げて、心を挙げて、どんな時も、どんな場所でも、神様の御言葉を胸に刻みながら生きることが出来ます。神様の御心に突き動かされながら、神様の愛を受けて神様に愛を返す、その人生をこれからも続けていきましょう。この受難節、私たちにはそれが出来るほどの力が与えられています。希望の時まで、この歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書9章35～41節

- ・ 35: イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」